

に違ひないからである。そして多くの不平不満の聲を聞くかも知れない。假令それが少数の者であつたとしても、満足に黙々として、不平に喋とするのが人間多数の常であるが故である。

このことは歴史の研究にも當嵌められる。同一資料を有し、同一事件を述べるとしても、その史家の立場の相違に依つて全く異なつたものが出来上る。従つて石田三成は義侠の士ともなれば、狡智の輩ともなる。事實少しく資料を探れば何れにも適する材料を発見することが出来る。同一事件について全然反対の材料を得、しかも何れも確實なる證據たること少なくない。その選擇取捨は一に史家の見解にある。恰も爲政家が實際問題に當つて不平不満を聞き分けるのに一の苦心を要するが如きである。要するにいひ古したことはあるが、世相は過去といはず現在といはず、恐らく將來においても複雑多様である。簡単に片づけ得るものではない。この多様な世の出来事についてよき判断を得んと欲するならば、先づ自己のよき立場を作らねばならぬ。よき立場を作らんと欲するならば、生涯一學徒として他の教を乞ふ必要がある。自己本来の立場を意識して作り得るものではない。幾多の體驗に依つて自ら生ずるものである。如何なることも一の體驗として價値がある。同一體驗からもその受ける者の能不能に依つて深淺

高低を生ずる。かく考へ又他の立場をも許容し得るならば區々たる小不平は自ら消滅するであらう。唯實際事を行なふに際し、假令幾多の毀譽褒貶あるとも、少しも顧慮するところなく、自らよしと信ずることを行なふところの勇氣が必要である。

(昭和二年)

色  
盲

白が黒にもなり、黒が白にもなるのが世の中の現象である。黒は黒、白は白と、黒白が明瞭に表現されてゐるならば、社會評論も、歴史も、人物月旦も大いに助かる。黒と白とが混淆して判然としてゐないから、簡単に判断を下し得ない。そこに歴史や傳記の面白さがあるともいへる。

兎角世の中には簡単に判断を下さなければ氣の濟まない人間がゐる。善いとか悪いとか、どつちかに片づけなければ納得しない。物事を單純に考へてゐる素朴な人達に多い。考へ方が一圖である。すべてのものを黒と白とに分けたがる。しかし灰色もあれば、赤もあり、黄もあり、

紫もあり種種様様である。千紫萬紅である。それらを評論し、描寫するのには黒白だけでは不足である。黒に近い色もあれば白に近い色もある。そこで黒白の断定は相對的である。

その上白と黒との區別の主觀的なのが世の中の現象である。甲は白だといふ。乙は黒だといふ。見方の相違が一つものを黒にもし、白にもする。赤色と青色との區別のつかぬ者は色盲と稱して、醫者にも軍人にも、運轉手にもなれない。客觀的に赤色と規定されたものは、如何なる角度から何人が見ても赤色でなければならぬことに定められてゐる。それに反して社會現象は見方の相違に依つてどうにでもなる。元來黒白混淆であるから、黒だけ拾ひ出せば黒になり、白だけ拾ひ出せば白になる。現在の世の中の状態から悲觀的材料を拾ふことも、樂觀的材料を選り出すことも何れも容易である。加ふるに悲觀的見方をすれば、樂觀的材料も悲觀的材料となる。

學者は出来るだけ客觀的にものを説明する必要がある。足利尊氏は忠臣にあらずと断定するに際しても、當時の社會状態を知悉し、あらゆる角度から検討し、證明しなければならぬ。客觀的に説明することは、實際としてなかなか困難である。徳川時代の百姓が農奴的であるか、

自由農民的であるか等といふやうな問題でさへ容易に断定出来ない。農奴とする方が説明に都合がよいから農奴とするなどは學者的でない。自由農民的な資料が多少ともあつたとするならば、それが如何なる事情のものであるか、又例外なのか、十分採り上げて研究すべきである。況んや一種の社會發展説からそれに都合のよいやうな資料を並べたてるのは非學問的である。かうなると文化現象に對する評論はなかなか出來にくくなる。人物評論の如きは難中の難である。従つて社會現象について、もし自分の説が誤つてゐることを證據立てるやうな客觀的資料が提出されたならば、潔く自説を棄つるだけの寛容さを有つことが望ましい。

しかし世間で行なはれてゐる幾多の論争は、かうした學者の研究ではない。各自が各自の有する狭い限界内で、主觀的に黑白を争つてゐる。學者の研究は時間を要する。實際の判斷は早きを要する。客觀的な素材の有無などを問題としてゐる餘裕がない。己が黒と信ずるものは何處までも黒なのである。假令如何なる客觀的反證を提供しても駄目である。黒と信じた以上は白も黒である。上は廟堂における政論から、下は市井における口論に至るまで、結局落ちつくところは俺はかう思ふ、俺はかう信ずるである。そこまでゆけば立場の相違である。問答無益である。

である。

色盲者が俺は青と認めるといつて、赤色信號を無視して列車を運轉したならば、これほど危険なことはない。當人は職に殉ずるほどの決心を以つて事に當るつもりかも知れないが、乗客にとつて甚だ迷惑である。一家の主人が色盲だつたら、會社の重役が色盲だつたら、廟堂に立つ人人が色盲だつたら、家族、社員、國民にとつては、それこそ非常時である。

社會の諸現象は複雑であつて、容易に黑白を客觀的に決定し得るものではない。それだけに違つた見方をする反對意見を十分に傾聴する必要がある。青と思つた信號を何人でも赤であると注意する者があつたなら、一應これを確めるのが運轉手の責任であらう。少しも反對の意見を認めず、抑壓して、己が意見のみを押し通すことは、主觀的になり易い社會觀察にあつては、少なからざる危険が存する。この意味においても言論の自由は十分に容認すべきであり、反對の議論については十分に傾聴するの寛容さを有すべきである。歴史家や評論家の色盲の弊は間接的である。實際社會の指導的地位にある者の色盲は、事の大小となく、その弊は直接的である。

(昭和十一年八月)

何らの批判なく他の學説を自己の思想の根柢となし得る者は幸福である。それは一つの信仰だからである。何らかの信仰を有する者が安心立命の地位を確守し得ると同じく、彼等も又一種の強味を與へられる。世の中にはかういふ性質の勇敢者が少なくない。

しかし未だそれらは一つの學説を以つて自己の指導者となす者であるから、多少とも理論的關心を有する。さらに一步進んで學説の内容を問はず、ある人物を以つて自己の指導標となす者がある。これらはさらに一層信仰と性質を同じうする。彼等はその神聖化せる人物の言論

に矛盾があらうと、撞着があらうと少しも問題とならないのである。そのいふところに全く自己を没却してこれに従ふ。この種の人もその言論において勇敢であり、果斷である。

だがある一つの學説にしる、又はある思想家の到達せる結論にしる、それらは決して無批判に前人を模倣したのでないことは勿論、偶然考へついたのででもない。それに到達するまでには幾多の疑惑を重ね、思索を凝らしたものである。かつその思想家の境遇と時代とは全く特殊の體驗を與へ、それらの體驗はその人の思想を形成するに役立つ。然るにその體驗と思想との關係は主觀的であつて、第三者の容易に覬覦することの出来ないものである。

甲と乙と同じ經驗をなしてもその影響するところは甚だ異なる。かく考へれば如何なる思想家の言論と雖も、直にとつて自己の思想と同じとなすことが出来るであらうか。違つた世界に住む者が同じ結論に到達することは、それが複雑な社會觀であればあるほど、困難になつて来る。かくして生ずる相互の批難攻撃に罵詈譏、陥らざること稀である。近時わが國學界の

論争の多くはこの種のものである。相互に何ら益するところがない。

◇

先人を信じ、先人の言論を奉ずる思索態度は比較的容易な途である。忠實に祖述すればよいのである。しかし又この忠實なる祖述が相当大なる努力を要する。よき祖述者は極めて少ない。多くは單なる表面的模倣に止まり所謂亞流の亞流となる。この亞流の亞流こそ最も喧騒であり、又その師を誤る者である。

◇

先人の言論を正しく批判することは甚だしく困難な業である。さらに自己の独自の思想的立場を形成し、それに依つて生活現象を批判せんとするのは一層困難である。又時には懷疑的に陥り時には否定的となり、精神的苦痛は決して少なくない。しかもその生涯に果たして思索的完成を期待し得るかどうかも解らない。それでもなほ私自身にとつてはこれら二つの途の中、後者の生活の方が好ましい。

◇

假令それが先人から見れば、淺薄であり、貧弱であるとしても、自己の努力に依つて自己の境地を開かんとするところに無限の價値を認めるのである。

(昭和四年八月)

#### 批判なき社會

批判なき社會は死せる社會である。唯と附和雷同の聲のみを聞き、異論を唱ふる者を悉く異端視するやうな爲政者は眞に國政を託するに足りない。世の中の現象は簡單の如くにして複雑である。如何なるものと雖も一方からの觀察のみを以つてしては、正解し得ない。表もあれば裏もある。あらゆる方面から、あらゆる角度から検討しなければならぬのが世態である。おのれの好むところに従ふは人情の常ではあるが、好みは兎角に偏し易い。偏した角度からのみ觀察すれば、事物は歪曲して見える。衆盲の批評と雖も綜合すれば、ある程度まで正體を理解するに足るであらう。一言の斷言は甚だしく危険である。あらゆる批判を沈黙せしめて、それを以つて國論一致せりと解するやうなことがあつたならば、それは大なる間違ひである。強大なる權力は時に異論を壓迫沈黙せしむることが出來よう。しかし壓迫は何時か爆破されずには

ゐない。人類は死せる社會に満足してゐられるものではない。あらゆる言論が批判力を失ふ時その社會の進歩は停止する。創造力を失ふ。一國の進歩發達は權力の重壓に依つて作られるものではない。幾多の批判に依つて相互に反省を加へ新しき理解の途に進む時、進歩は自らにして生まれる。今やわが國論の統一が要求されてゐる。しかしそれは權力に依つて統制さるべきものではない。異論を有する者を沈黙させることでもない。各自が現在わが日本の立つ地位を十分に認識し、日本民族の使命を十分に意識し、その抱懐する見解を忌憚なく披瀝することに依つて創らるべき統一である。われらはこの意味において特に今日のやうな時局に、活潑なる批判の言論界に行なはれんことを切望して止まない。

(昭和十三年二月)

## 根 (一) ん

學問する者にとつて最も必要なことは根氣である。昔から運・鈍・根の三つの「ん」が成功の秘訣だといはれてゐるくらゐで、何事に依らず根氣は必要であるが、わけても學問しようと志す者には不可缺の要件である。運は人力の如何ともなし難いもの、鈍ももつて生れた天稟、

自分の力でどうにもならぬ。唯根はその人の努力次第である。兎角才智の鋭い人は、早わかりがする。物をつきつめて考へない。人が一言いふと、すぐ合點する。書物を一二冊讀むと、もうそのことに通曉したやうに思ひ込む。従つて才のある者が失敗して、鈍才が成功することになる。才ある者が、その才を頼まず、自らその才を反省し、疑惑を匡してゆく根氣があれば、鈍才よりも一層よいことは明かである。結局英才であると鈍才であるとを問はず、物事に徹底せんとする根氣が必要だといふことになる。一時は熱狂するが、何時か忘れたやうに冷却してしまふやうな者には大きな仕事は出來ない。世間的な華々しい事業などで、何時か忘れられ、棄てられてしまふものが少なくない。學問は決して華々しい事業ではない。根氣と熱情とをもち一歩一歩開拓してゆく仕事である。動もすれば日本人は熱し易いが、又冷め易い國民性を有する者といはれる。もしさうであるとすれば、斷然改めなければならない。今までの學問の多くは外國人の手に依つて築かれた。しかし將來の學問はわれわれの手に依つて創造さるべきである。豈ひとり學問のみではない。あらゆる方面に向つて、日本民族の發展を期さなければならぬ。その礎石を與へるのが現代日本人の使命であり、義務である。非常時局の名の下

に、今日提言され、明日は忘却されるやうな種となる提案がなされてゐるやうであるが、その多くが日本人の缺點である模倣性と熱狂性とを暴露してゐるに過ぎない。眞に偉大なるものを成就せんとするには、異常なる根氣を必要とする。

(昭和十三年六月)

迎 春

萬象は流轉して止まない。變遷してゆく時の流れには、何處を句切とすべき限界もない。新年といひ、元旦といふも、人間が勝手に句切をつけたものであつて、それ自體には何らの意義もない。死ぬ者は元旦と雖も死に、生まれる者は大晦日と雖も生まれる。だが人間にとつては段落をつけることが重要である。すべてのものを觀察するのに、段落なしには出来ない。歴史現象に時代別をつけて、封建時代だの、資本主義時代だのといふのも、そのためである。種となるものに名稱を附して類別するのも、そのためである。下等動物と植物との區別は頗る困難であるのにも拘らず、兩者を一緒にしては、段落がつかなくなるから、區別する。段落は一種の假定に過ぎない。限界のつき難いものに限界をつけ、段落のつけ難いものに段落をつけてゆ

くところに知識が始まる。差別相を明かにすることに依つて、物の本質を把握することが出来る。去年と今年と本質的に變るところがあつたとしても、元旦から急に變るのではない。しかし元旦に句切を置くことに依つて、去年と今年との比較が可能となり、異質的なものを認識する手がかりとなる。去年不幸であつた者は今年幸福ならんことを欲し、去年幸福であつた者は、さらにより多くの幸福を祈ると共に、昨非を悟つて、新しき出發點をここに見出すことが出来る。人間の生涯に何十回か、かうした反省の時期を與へることは、人生にとつて必要である。この點からも段落は意義がある。南京が陥落して一段落を感じ、漢口をわが手中に收めてさらに一段落を感じた。しかし事變は依然として續いてゐる。一段落ごとに反省しつつ、さらに躍進しなければならない。段落は終局ではなく、次ぎへの出發點である。この意味で本年の正月は單に個人にとつて意義があるばかりでなく、長期建設への第一段階へ向ふ初年度の正月として、日本國民全體にとつて、最も意義深き新年である。われわれはこの新春を言祝ぐと共に、新しき勇氣と覺悟とを以つて當面の諸問題を解決しなければならぬ。(昭和十四年一月)

數年來盛んに經濟學について實踐性といふことがいはれ、相手の議論を攻撃するのにも、實踐性が少ないとか、實踐性がないとかいふ。攻撃された方でも實踐といふことを重要視してゐるので、實踐性がないといはれると、何か著しい批難を受けたやうに、自家辯護をなし逆に相手の議論の實踐性を云とする。

これは日本ばかりのことではなく、イギリスなどでも remoteness from reality と云つて從來の經濟學を批難してゐる。そのくせ「實踐」とは何か。「現實」(reality)とは何かと云へば、明確に理解してゐる者は極めて少ないのである。要するに世の中の經濟状態が變化して、從來の經濟理論では説明出来ないものが多くなつたために、經濟學不信任となつたわけである。即ち現實は純粹な經濟のみの現象ではなく、經濟外の諸要素が作用してゐる。その經濟外の力が強くなつて來たために、さうした批難を生じたのである。

そこで經濟學の科學性を弱めて妥協的方法を探らんとする學者も出來、又甚だしきに至つ

ては官僚や實際家を講壇に立たせて、經濟學の實踐化が出來ると考へる者さへ出て來たのである。笑止の至りである。

(昭和十四年七月)

#### 非常時 隨想

現在は人類にとつて大なる試煉の時期である。經濟的にも、政治的にも行詰つて、何らか新しきものを得んと努力してはゐるが、何人もその新しきものが何であるかを知らない状態にある。そこに現はれて來るものは混亂と低迷とである。複雑怪奇である。

現在は實力が物をいふといふ。指導的精神が明瞭でなく、思想的貧困を暴露してゐる今日、實力が物をいふのは當然である。しかしそこにいふ實力とは必ずしも眞の實力ではない。眞の指導的精神に基づかざる實力は單なる暴力に過ぎない。暴力は最後の勝利を得ることは出來なく。



ある民族が眞に偉大なる民族であるならば、確乎たる信念に依つて行動すべきであり、その



信念は自らにしてその民族の内部に育まれたものでなければならぬ。換言すれば外部から與へられたものであつてはならない。古き民族的傳統と新しき民族的精神とに依つて、その内部からもり上つて來たものでなければならぬ。それは反省に依つて自覺すると共に、修練に依つて確たる自信にまで高められたものでなければならぬ。

これらは輕燥なる宣傳運動に依つて形成されるものではない。政治家の宣言や識者の雄辯に依つて惹起し得るものではない。實行を伴はない宣言や議論は却つてその民族的自覺に反作用を生ずる恐れがある。理論は抽象に流れ、政治は信用を失ふ。

◇

今日人類が如何なる場面に遭遇してゐるかについて明確なる知識をもち、その民族の有する使命と能力とを認識し、各人がその與へられた職能を十分に果たさんと努力するならば、民族的自覺は著るしく高められ、眞の實力は自ら涵養されるであらう。獨善的宣傳運動に依つて、多くの時間の労働と資材とを浪費することは、現在の如き時局下にあつて、最も賛成し得ない點である。私は非常なるが故に、先づその與へられた職分を各人が忠實に果さんことを特に希望する者である。

望する者である。

(昭和十五年五月)

懐古的互動

現在の状態に甘んじ得なくなると、ある人は過去を憶ひ、ある人は將來に希望を繋ぐ。歴史研究が過去に存した美點を擧げて、これを誇張することは、時に政策的効果がなくはないが、概していへば人を退嬰的に導き、事實を歪曲することが多い。

例へば近頃隣組又は部落常會が日常の社會生活に重要性をもち、新體制にあつてもその細胞組織として重要視されるに及ぶや、徳川時代の五人組制度なるものが急に世間の視聽を集めるやうになつた。ラヂオに、講演に、五人組賛美論をしきりに宣傳する者が多い。果たして五人組制度はそれほど賞讃さるべきものであつたらうか。

徳川時代の制度の中、五人組制度ほど幸運な制度はない。かつて歐米の自由自治の制度を模するに急であつた時代にも、それが村民の自治機關であつたとして賞美され、今又全體主義の主張さるる時代にあつては、相互援助機關として推賞されてゐるのである。徳川時代の五人組

制度が實際に自治的であつたか、相互援助的であつたか、又その本質がそれらを目標としたものであつたかどうかについては少しも吟味することなく、唯五人組帳の前書に掲げられてゐる二三箇條を取上げて證據として論じてゐる。それらの前書の大部分は當時の御觸書、即ち法律であるが、その大部分は實行されざる法律であつた。規定されてゐさへすれば直ちに實行されてゐたと思ふのはあまりにも單純なる史料検討である。

新體制下における隣組は單なる五人組制度の復活であつてはならぬ。むしろ過去の五人組制度に見られるやうな偏狹な封建的殘滓は一掃されなければいけない。傳統を尊重することはよい。しかしあまりに傳統に拘ると澆季思想になる。現在來世觀は新しき發展を期待する國民の採るべき世界觀ではない。わが國人の思想にはこの種の懷古的傾向が強い。「世が世ならば」とか、「むかしはよかつた」とかいふ詠嘆的感傷は日本人の好み過ぎるところである。過去の制度の讚美はさうした氣持に強く反映する。むしろ今は新しき希望を國民に與へて、建設的に乗出すべきであらう。

(昭和十五年十月)

出版後記

慶大經濟學部の重鎮として、また經濟史・經濟思想史家として、野村博士の盛名は餘りにも高い。が、同時に古文書の蒐集家、その解題家としての博士も亦著名である。本書は、この方面に於ける博士の遺著を剩すところなく示した最初のものである。讀者は、流麗なリズムをなす行文のうちに、人間生活に對する博士の深い理解と厚利な觀察とをみて、眩目されると共に、「むかしと今と」を結ぶ歴史的相似や暗合に、深い興味を覺えられるであらう。なほわが社からの博士の新著に既刊「經濟史」があり、近く「商業政策」が發刊されます。

昭和十五年十二月二十四日印刷  
昭和十五年十二月二十八日發行

むかしと今と  
定價二圓三十錢

著作人 野村兼太郎  
發行人 石山 皆男  
印刷人 神尾 福太郎  
印刷所 東京市麹町區霞ヶ關三ノ三  
ダイヤモンド社印刷所

發行所 東京市麹町區霞ヶ關三ノ三  
ダイヤモンド社  
大阪支局 大坂市北區中之島(朝日ビル)  
電話北區五〇六・振替大阪五〇六

品全完不の等丁編丁落一萬がすまり用てし致を意注分十はて紙に物販出社弊  
。すまし致替取おにち直てに摺頁料送方置。いさ下出申おは節のげ上買おを

野村兼太郎 著 慶應大学経済学教授 博士

# 經濟史

野村博士の

「經濟史」を読む

田沼征

人類生活の發端から、すこぶる平易流麗に説き起し、獨占資本主義に至るまでの「經濟史」を、初學者の頭にしみじみと諒解させる絶好の書物が、先般、ダイヤモンド社から出版された。絶好といふよりは、寧ろ不思議と云つていいほど、取付き難い經濟史を一般人に解らせてくれる書物である。

本書は、特に初學者のために、全く書下ろしの筆を執つて、隨所に澤山の挿話や警句をはさまれながら、從來のいはゆる「經濟史の「理」に捉はれず、流通無碍の行文を敢てされた點、正に、一巻の經濟史物語である。殊に百二十數葉の挿繪と寫眞とは、どれほど初學者の理解を助けるかわからない。

と、いつても、本書は單に初學者のみならず、經濟を専攻する者が既往の知識を整理し、來るべき新しい機關への編成替へを考へるに當つても甚だ有益な名著である。(編判二五〇頁・價二圓二十錢・送十五錢)

近刊

商業政策

野村兼太郎著  
¥二・二〇 千・一五

ダイヤモンド社刊

終

